岐阜経済大学論集 30 巻 1 号（1996 年）

〔翻　訳〕

癸丑日記（下）

作者　仁穆大妃内人
訳者　梅山秀幸

三十七

こうした次第で，このとき，中還とナンの勢力は盛んですべてに及んで，手のつけようがないほどだった。ナンは侍女と尚宮たちを懐柔し，また中還は下人たちを手なずけて，

「今年の十一月に日を決めて，そちらの御殿の女房，尚宮，下人たちをみなつれ出すことにしよう。大妃さまのもとには子どもの召使いを二，三人だけは置くことにして，水ぐらいは汲んでさし上げてもいいが，自然に衰えてお亡くなりになるようにするのだ」

などという。みなはそれを聞いて，泣いて悲しみ，

「こうなれば，いっそあの世に行って，安らかにお過しになった方がいい」

という人もいるが，

「わたしは，大妃さまを失い申した後に，他の御殿に行って，どうして，あえて生きて行くことができようか。そんなことにならないうちに死んでしまいたいが，死ねばまた，両親に禍が及ぶことになって，いったいどうすればいいのだろう」

といって，泣く人もいた。

大君を連行したときのように，少しの猶予も与えず連れて行こうとするので，暇乞いの挨拶もせず，自分たちの品物の整理もおろそかだったが，何とか身の回りのものだけそろえ，髪の毛を櫛けずって結い上げ，衣服の包みを脇に置いて，陰暦十

一月十五日を待っていた。

大概，嘘をでっち上げようというときは，始終ひとしく辻褄を合わせるものだが，今回の死を隠し通すことはできなかった。大妃さまは，

「亡くなった女房たちの道具は罪人のものだといって，全部持って行こうというが，だれも動かしてはだめだ。そのままにして置いてください」

とおっしゃって，あるいは，それぞれの下人たちが持って行こうとしても，許されなかった。

大妃さまは女房たちを呼んでおっしゃる。

「わたくしの側近くにいた女房たちが，このわたくしのために，深い恨みを抱いて死んで行ってしまった。その惨憺たる思いを克服することはむずかしい。その死んだ者たちには，親疎はともあれ，一家親族が残っていて，品物を渡すことはできるはずです。後日に開門を許されたとき，かたみの品が何もないようでは，どうすればいいのか。死んだ女房たちの品物はすべてしまって置いて，いつでも親族に返せるように，すべて数え上げて帳簿に記録し，鍵をかけ，保管するようになさい」

そうおっしゃって，管理なさったが，中還は陰口をたたいて，

「これほど生を貪ろうと努力なさった上，死んだ者の道具まで保管しようとなさるのか」

といって，道具を見守る人びとを憎むことがいつもはなはだしかった。

大君の調度は，ナンがすべて持ち出してしまい，その後に，わが身大事と光海君のところへと姿をくらまそうと考えていた。

三十八

ところが，どうしたものか，癸丑の年（1613）の冬となっても，外に出る許しがないので，ナンは毎日不機嫌に，

「わたしを光海君妃の寝室尚宮として使おうといってくださったのに，どうして今になっても，外に出してくださらないのだろう。だからこそ，光海君は牛のように愚鈍で，懿仁大妃さまもあきれて，孝誠の心もない，まったくの人でなしだとおっしゃっていたが，本当にそのとおりだ」

とぶつぶついって，

「大妃さまはへんてこな大妃さま，大君を産んではみたものの，その地位を保つこともできず，こうした悲しい目に遭っても，それは全部ご自分のせいだ。わたしは何の罪もないのに，どうしてこんなところにさいなまれながら生きなくてはならないのか。兄弟や甥たちは自分たちだけ安穏に生き，わたしはといえば，まるで肥え溜めにはまって，引き上げてももらえない。だれひとりとして，おばさんのことを考えてもくれないのか」

と，さらに続けて，大声を張り上げた。ある女房が聞くに耐えず，

「あなたが出て行かないのは誤りで，さっさと出て行くべきでしょうよ。わたしがこちらに住んで三十年にもなるが，こんな時節に大君をお出ししたことも，百回誤りを犯したことです。ただ自分自身が悲しい目に遭ったとしても，大妃さますら人に監禁されなさるような憂き目にお遇いになっている。女房の立場で，おのずから死ぬなら死ぬ，生きるなら生きるという分があるはずのもの。あなたは何を傲り高ぶって，国母さまをとやかくいうのですか」

とたしなめた。ナンはそれを聞いて，怒り出し，

「あんた方は国母の恩恵を大いにこうむって，うらみなど何もないでしょうが，わたしは何の恩恵を受けたこともない」

とどなりつけ，声をいっそう張り上げた。

死んで行った金尚宮については，いても立っても，そして歩き回っても，夜昼となくぶつぶつと，

「壬辰の年に先王につき従ったという理由だけで，年が三十にも満たずに，あの人は尚宮の職におさまって，わたしはといえば，つき従わなかったために，尚宮にして欲しいと，大妃さまに申請することもしてくれなかった。あの人は死んで行くときも，善良そうなふりをして，恰好をつけて死んだことだ」

といって，寝室の窓の下に座って，大きな声をさらに張り上げて，

「金尚宮だけを人間とお思いになって，ありとあらゆる恩恵を与えて，こんなざまになって，今でも金尚宮をかわいそうに思っていらっしゃいますか」

といった。ひとりの女房が答えて，

「金尚宮は本来心が清く，忠誠で，国のことに心を尽くして，両殿の間が和睦するように力を尽くしたが，間に姦邪な連中がのさばって，余計なことをしでかしたがために，国母さまが悲しい目に遭っていらっしゃるのだ。あなた方が悪いので，金尚宮はあのように死んだのではないか。あなたは軽々しく国家の重大な話

をして，身分の上下の分別もできないのか。口があったところで，どうして，どんな話でもしていいということがあろうか。あなたの勢力が今では泰山のようで，恐れて話さないことも多かったが，さあ，あなたはこんな便壺のような所にいないで，光海君妃の尚宮にでもなって，すみやかにここから出て行ってください」

といった。

「なにはともあれ，わたしを連れ出してくれれば怒りもすまい。忘れまいと，後を振り向いて，じっと引っ捕えられたままでいられようか」

と，ナンはいって，甲寅の年（1614）の春にようやっと外に連れ出された。

ナンが出て行くときには白粉を塗り，臙脂色の頭巾をかぶって出て行こうとしたので，ひとりの女房が，

「長い間お世話になって，暇乞いのあいさつもしないで，そのまま出て行こうというのは，召使いとしての道理ではない」

といった言葉が十分に耳に入ったかして，ナンは頭巾をかぶったままやって来た。

「かぶっているものをお取りなさい。御殿の前でどうしてかぶり物をしているのか」

とたしなめると，ナンは聞かずに，

「ふん，だから，どうだというんです。ここが御殿というのですか。いつ脱いで，いつかぶらなくてはならないのですか」

といって，かぶったまま入って来た。

三十九

ふだんのときも，前からいた女房たちは，みな水で顔を洗うだけで化粧っ気はなく，古い服を着て，府院君の喪に服していたが，ナンは，

「わたしは大妃さまの使用人じゃありません」

といって，白粉をつけて往き来していた。別の女房たちが，

「わたしの妹が東宮殿の寝室につかえているが，もし宦官の目についたら，いったいだれの妹かと詮議するかもしれないので，だれの目についても，できるだけへりくだり，身をつつしんで，人の口の端に上らないように振る舞うべきです」

といっていた。

ナンは平轎子に乗り，その下僕は馬に乗って，出て行き，光海君のところに入って，そこで過ごすようになった。

大君がすでに亡くなられたという消息がまだ伝わっていないころ，だれかが夢を見て，その夢の中で，大君がただひとりで入っていらっしゃって，泣きながら，

「あの者がわたしを殺し，わたしは人間の世界を未練なく見捨て，今は楽しい所に来ている。死んで，むしろすがすがしい境涯になった。捕われの身となったのも，人間の世界の憂き目をすべて見極めるよい機会だった。今は伝説の呂洞賓や文天祥や白楽天や，それにわが国の崔致遠やコポクサチュ（未詳）などとともに遊ぶとしようか」

とおっしゃって，

「あの世にそんな人々がいるのかって。わたしのいる所というのは仏の世界で，彼らがいるのは神仏の世界だ。友人としてつき合って，ともに遊ぶというわけで，いつもいっしょにいるわけではない」

と，おつけ加えになる。そうして，

「あまり悲しんでばかりいないで，このことを大妃さまにお伝え申すよう」

とおっしゃったので，

「どうしておんみずからいらっしゃって，お申し上げにならないのですか」

と申し上げると，

「わたしをなつかしがって，大妃さまは毎日泣いていらっしゃるのに，わたしが参れば，いっそうお悲しみになるから，参れないのです」

とおっしゃって，泣きながら，立ち去って行かれた。

甲寅の年（1614）の三月に，光海君はこちらに宦官を送って，卞尚宮にいいわたした。

「お前たちが違心を抱かず，こちらにもっぱら心を用いて仕えていれば，平穏に生きることができたのだ。なのに，どうして，大君を王にしようとして，盗賊たちと親しみ，内ではひそかに呪いを行い，自身の生命を安全に保とうとしないのか。ただ今も生き残っている女房たちは，わたしの言葉をとっくりとよく聞いて，いうとおりにしておればいいのだ。もし，過ちがあれば，はっきり言って置くが，法によって処断するから，それをわきまえた上で，行動するがよい。

大君は当初はソウルに置いたが，罪人を城中に置くのは正しくないと，朝廷中がせっつくので置くことができず，江華島にうやうやしくお移ししたのだった。

しかし，自身の生命が薄命であったのか，幸いが過ぎ去って，しばらくして死んでしまった。罪人の死んだ者は弔わないのが法であり，朝廷の者は放って置くようにいったが，わたしは兄弟の間で見捨てることにしのびず，兄弟の義理というものを尊重して，役人に緋緞のふとんと柩を用意させて，丁重に葬った。

大妃さまは御存知になったところで，いっこうに悲しむ必要のないことなのだ。しかし，京城から江華島へ移ったときも御存知なく，自身の寿命で死んだのに，このわたしが殺したとなさる気遣いがなくもない。しばらくたってから，大妃さまにはお知らせしろ。今すぐにいうようだと，お前たちをつかまえ，獄につなぎ，三族を滅すことにするぞ。お前たちだけ知っていて，ゆっくりと事を判断おできになるようなゆとりを大妃さまがお持ちになって，なんの不都合があるだろうか。お前たちが仕事のあい間あい間に座って，ため息でもついて，悲しいという言葉だけでも吐いて，もし大妃さまが事実をおさとりになるようなことがあったら，わたしはわたしの法を果すまでなので，お前たちはそのように心して置くがよい」

それに対して，卞尚宮は，

「ご命令を守ろうとしても，大妃さまはしばらくの間も哭泣をおやめになることがなく，しばしば首をくくって，自決しようとなさる。お付きの者がちょっと目を放すとそんなことになる。若い者と年老いた近侍がみな死んで，愚鈍な者が小さな童とともに，夜昼とはなれることなく，お側にお仕えしている。人の生命は不定だが，一年がたち，二年目の春となるまで，お粥しか召し上がらず，万一，これでお亡くなりになったとしても，どうして，わたくしども召使いの責任でしょうか。心を尽くしてお仕えいたしますが，そのように恐ろしいことをおっしゃると，どちらの殿にもやっかいなこととなりましょう。むしろわたくしは死んで，いっそのこと，亡霊にでもなって，この世を見守ろうかと思うのですよ」

と答えた。

四十

翌日，ふたたび光海君は人を送って，

「たとえそちらが死にたいとしても，こちらも，そちらに罪がなくて，殺さなかったわけではないのだ。ただ，こちらの御殿をうやまって仕えるという条件で，

殺さなかったので，大妃さまには食事をたびたびすすめて，お召し上がりになるようにして，悲しんでお泣きになるようなことがないようにしろ」

といってきたので，それに答えて，

「俗諺に，『小さな子も自分の意にそまずば喜ばず，気に入れば泣き声はやむ』とかいいます。それと同じこと。まして大妃さまは，人にない悲しみに遭い，夜昼に哀痛の泣き声をおやめになることがない。二年になるまで，お母さまとお子さまの生死を御存知ないのだから，当然のこと。さながらお身体に火でもついたかのようです。生きた魚を日なたに置いたように，のたうちまわって，夜昼となく泣き通し，冷水と氷だけしか召し上がらず，食事をおすすめする方法がいっこうにございません。ときおり，お慰めの言葉を申し上げ，王さまがお粥でもすすめてお召し上がりになるようにという，お言葉をくださるのが，悲しみにかき暮れていらっしゃっていても，やはり母子の情というものをわきまえなさって，どうして感動なさらないということがありましょう。蜻蛉のようなわれわれ召使いの身にとっても，おかげで生命の糸をやっとのことで保つことができます」

といって，大妃さまに，光海君の言葉をお伝えした。大妃さまは，

「王さまがこちらにやって来て，わたくしを母親のように遇するなどということがありましたか。いったいだれがわたくしを国母だと思おう。あなた方はみな出て行きなさい。わたくしは泣きに泣いて，くたびれはてて，死んでしまいましょう。食事をすすめる言葉など，まったく聞きたくもない」

とおっしゃって，もう食事をおすすめすることもできなかった。

大君が亡くなったことを知って，お側に仕える人びとの悲しみはきわまりがなく，日ごと新たに苦しみ，悲しんだが，大妃さまを慮って，どうして泣き声を出すことができようか。ただひたすら胸をたたいて，怨痛するばかりであった。

四十一

四月になるまで，大君が亡くなったことは大妃さまには伏せて置いた。大妃さまは夢をごらんになって，その夢では，両の乳房から乳が流れ出し，みなが赤子を抱いており，大妃さまがお抱きになるよう渡そうとして，御自身も泣きながら喜んで乳を飲ませようとなさったところ，眼がさめて，夢であったとおさとりになったのだった。

「胸さわぎがして，全身が震えて鎮静することができない。どうして，こんな夢を見たのだろう」

と，大妃さまがおっしゃるので，お側に仕えているものが，

「乳というのは子どもの糧で，大君が長寿でいらっしゃることを表していましょう。王さまのお気持ちが解けて，大君とお会いになることがかなう祥瑞の夢ではありますまいか」

とお答えした。しかし，その後に，ふたたび夢の中で，大君が大妃さまの胸に抱かれて，

「髪の毛を櫛で解く間に天国の都を見て来ましたが，人間世界のポクカヅがオコヶ（不詳）を作るのに専念して，わたくしの方を見てくれないので悲しうございました。わたくしはあの世の玉皇上帝にお会いしたのですよ」

といって，お泣きになる。大妃さまがその肩をつかんで，

「どこへ行っていたというんです。わたくしはあなたと別れ，悲しくて，死のうとまでしたのにあなたはどうして行った所もいってくれないのです」

とおっしゃると，

「知ったところで，どうしようもないのですよ」

とおっしゃって，すっと消え去って行かれた。大妃さまが，

「これがどうして尋常で，普通の夢といえよう。光海君は大君を殺して置いて，わたくしをだましていたのではないか。あなた方もありのままに話してくれればいいではないか。この悲しみは一時もこらえられない。即刻，わたくしも死んで，同じ所へ行ってしまいたい」

とおっしゃって，お泣き叫びになる。尚宮も悲しみをこらえきれず，

「涙が流れ，衣服もすっかり湿ってしまいました。この悲しみをどうしてこらえることができましょう。たとえ鉄石のように強い精神を持っていたとしても，どうして耐えることができましょう。消息でも通わせようとして，通わせることができず，大君はこうして夢に現れて，真実をお告げになったのでしょう。光海君はわたくしたちをだまし，真実を隠そうとしたものの，大君は英明でいらっしゃって，夢にたびたびお現れになったのでしょう。人間はだますことができても，神霊はだますことができないものですね」

と語った。大妃さまは卒倒して，死んだように横になっていらっしゃったが，冷水でお気づかせして，申し上げた。

「大君は虎の口の中に入って行くことを免れることがおできにならなかった。今となって，どんなに肝腸を燃やして悲しんだところで，生き返りなさるわけではありません。しかし，病気にかかった御実家の兄弟のお子たちが，今はだれも頼るものとてなく，ただ大妃さまだけを頼りにして生きていらっしゃいます。大君のために，みずからの玉体を害そうとなされば，光海君はかえってうれしく，大妃さまは心もっとも凶悪で，まじないを行って，事が露れ，そのために自尽したと歴史書にも記され，悪名を後世にお残しになることでしょう。大妃さまが先にお亡くなりになれば，ありとあらゆる悪事がすべて大妃さまに帰せられることになりましょうから，この悲しみにも，しばしお耐えになるように。

われわれ召使いの身でも，ため息がでるばかり，どうして無惨な思いを禁じえないことがありましょう。平常時の，安穏な時節には，身を尊貴に持してお仕えしようとしていましたが，今や女房といっても，草野で草刈りをする賤しい人たちよりいやしく，まして殺されてその骸骨が町中いたるところに散らばっている。禁府・羅将の輩にまで追い回される始末で，先王のお側近くに仕え，懿仁大后との結婚の嘉礼に列なった人までも，みな重刑をこうむって，死んでしまったのは，まことに気の毒で，残忍のきわみでございました。わたしたちもいっそのこと死んでしまって，このように悲しい話を聞かなくてもいいようにしたかったのですが，大妃さまのことを思って，今まで生きのびて参りました。今大妃さまがお亡くなりになって，われわれだけが生きのびられる道理はありません。光海君は新たに獄事を起こすに決っています。大君の後を追って，現在残っている遺臣たちをみな悲しみの中に死なせるようなまねはなさらないでください」

大妃さまは，それに対して答えて，おっしゃる。

「わたくしだって，なにも考えていないわけではありません。東西もはっきり知らない子どもが自分の膝下で育って行くありさまだけでも見ていたかったのに，威力でそれを奪われ，その行く先も教えてくれなかった。その上，その子をとうとう殺してしまって，心を火で焦がすよう，皮膚を刀で切り裂かれるようで，悲しみをこらえることができない。しかし，お母さまや，わたくしのことで死んで行った兄弟のことを思うと，今死んだとすれば，あの世に行っても，父兄にも喜んで会うことができず，魂も恥かしくて，さびしくさまようことになろう。だからこの世で耐えることが多くとも，死ぬことはできない。

それにしても，どのような因果で，このように悲しい目に遭うのか。わたくし

に犯した罪はなく，わたくしがこうむっているこの艱難は，先王に向けてなすのと同じであって，たんにわたくしを憎んでのこととはいえないでしょう。先王がお可愛がりにならなかったという怨恨を，光海君はわたくしに向かって晴らそうとする。いや，わたくしに向かって怨恨を晴らそうとするのみでなく，わたくしの実家の一族や幼い大君をことごとく殺してしまった。これがどうしてただの悲しみだといえるでしょう。世々生々にけっして二度とこうした世の中に生れ出ることがないようにしたいものだ。それにしてもただ，ほんのわずかでも門を開けてもらって，年老いた母上の安否だけでも聞きたいものだ」

門の中に見張りに配置された宦官たちは，こんなお言葉を聞いたところで，知らないふりを通した。

四十二

春が過ぎて，夏が行き，秋となって，女房たちは吹き出物ができて，病んでいたが，あちらは

「薬でも煎じて，飲んでいろ」

というのみで，少しも意に介するふうがなかった。

卞尚宮が生き残っていたので，他の女房たちは母親を頼るように頼り，大妃さまも同じく頼っていらっしゃったが，その卞尚宮さえも病んで，伏してしまった。大妃さまはいっそう気が動顛して，どのようなことでもして，卞尚宮を元気にしようと，さまざまな薬を試して，治癒させようとなさったが，年も年のこととて，思いどおりにはならず，熱がひかず，いよいよということになった。

「手のほどこしようのないほど，女房の病が重いので，外に出させてください。宮廷を穢すわけにはいきません」

といって，何度も懇請したが，耳を貸すこともなく，もう一度請うに及んで，

「何をたくらんで，仮病を使って暇を乞い，外に出してくれと頼もうとするのか」

といったりしたので，恐ろしく，それ以上は返す言葉もなかったが，病勢がいよいよつのり，回復する見込みもまったくないので，今一度懇請をして，ようやく外に出ることが許された。別将や内禁衛や大殿つきの宦官やがみな差備門の中に立って，医女に卞尚宮の襦袢やパジまでめくって見させたりする。そのはずかしめるこ

とといったら，口にすることができないくらいはなはだしく，衣服の間に何か入っているとでもいうのか，日光に透かして見て，あるいは履き物を振って見たりして，その上で，宦官がいいつける。

「王さまの御命令はないが，別将および内禁衛将のみなが押し入って調べてみよう。あるいは手紙を懐中に抱いて隠し持っているかもしれない。大妃さまを信じずに，別将たちを看視に立たせて，動きを見届けさせ，後になって大事が出来しないようにしよう」

鼓子や下僕どもが尚宮を抱えて突き飛ばし，

「なんにもなかった」

といい，やっと，

「兄弟に入らせて，尚宮を連れて行かせろ」

といった。

尚宮の病が重く，心を落ち着けることができない。恥を見せることの軽くはない，気まずい病であるから，あまり人目に立ちたくないはずのものであろう。

女房たちみなが泣きながら懇願して，

「病が重くて救われようのない者が外に出て行くというのに，いったい何を持って行く恐れがあって，そのようにきびしく探そうとするのですか。もう死にそうな女房なので，それがわかって，出て行くのです。医女たちにくまなく探させ，恥を見せることがはなはだしい。この女房は常人ですのに，そんなことまでして，どうして大妃さまの体面というものを少しでも考えてくれないのですか」

というと，宦官たちは，

「わたくしたちにそんなことをいっても，どうしようもありません。わたくしたちだって死ぬのを恐れて，こんなことをしているのです」

と答えた。

こうして卞尚宮が宮闕の外に出て行き，しばらく時日が経って，大妃さまは，尚宮の病もきれいに癒えたことであろうから，また元どおりにもどしてほしいと請われたが，なしのつぶてであった。

四十三

卞尚宮は九月に出て行き，以前，監察尚宮として往き来していたチョンポクが仕

事が遅いということで光海君妃の叱責を受けて下獄していたのを，十月二十日には引き出して，ウントクは自分の姪をこの人の養子として，縁戚となった。内外に言葉を通して，どんなたくらみをするのかして，よくよくいい含めた上で，チョンポクを大妃さまのもとに入れて送った。

この人は本来おろか者で，運数がつかえ，年は六十になっていたが，子ども一人もいず，顔かたちが怪異で，その容貌は油を塗ったようにてかてかしている。ハングルの一字もよく書かず，懿仁王后のときから，自分が望む仕事についていないのを，いつも心の中でうらみがましく思っていた。このときも，自分の仕事に乗り気でなく，いつもふてくされているという話を聞いて，大妃さまは，

「自分の行実がよくないのをわきまえず，年を取るまで気に染まない仕事だけをして，面白くなく過ごして来たようだ。それも人として，可哀想なことではあろう」

とおっしゃって，監察尚宮の仕事をおまかせになった。ところが，両殿の間でたがいにお見舞いをさし上げることになっているのを口実として，朝早くお見舞いに出かけ，昼間になって帰って来る。あるいは夕方まで帰って来ず，ウントクや介屎とともに，日が暮れるのも知らず，その側で新たな無駄な時間を過ごした。

チョンポクが，

「大君は他の子と違って，お育ちになると，きっと大きくおなりだろう」

というと，ウントクがそれに答え，

「どんなに才能があったところで，どのくらい長生きできることだろうか」

といっていた。

大妃さまはこんな人間も御殿に入らせ，何もご存知なく，心はかぎりなく寛大でいらっしゃった。チョンポクはといえば，お目見えの挨拶もきっちりせずに，

「大妃はどこ。奥へ行って，わたしが来たと告げてください」

と尋ねる。

「どこかに行っていらっしゃるから，しばらく待っているように」

というと，

「わたしは，王さまがわざわざ寄こされたのです。卞尚宮が病にかかって出て行って，その代わりにわたしがお仕えするようにと仰せつかって来たのだから，早速，入らせてください」

という。そこで，

「何でせかせるのです。ずっとお仕えしようとやって来たのなら，わたしたちはますます心強い。今はあちらに退がって，やすんでください」

というと，怒り出して，

「わたしが喜んで来たと思いますか。気に染まないので，ことわったのに，王さま，王妃さまのお二人が，わたしがここに来て，お仕えするようにお命じになって，どうしてもいやなら重罪を加えようとなさったので，仕方なくやって来たまでのこと。いいと思って，こんな所に来るものか」

という始末。言葉づかいも凶悪で，しょっぱなから憎々しいことといったらない。早速，中に通って行き，寝室の一枚戸を開けて，まっすぐに入り込み，座って，大妃さまに申し上げた。

「王さまと王妃さまのお二人がわざわざこのわたくしめを呼んで，わたくしがこちらにうかがって，玉体のお側近くに侍って，たいせつにお仕えするようにとお命じになったので，こうしてやって参りました」

といったが，大妃さまはひどくけしからぬことと思って，お答えにならなかった。チョンポクはさっさと立って，外に出て，下人たちみなに，

「わたしが何のために来たのかなどと考えて，嫌ったりしないでほしい。わたしとて，何も好き好んで，ここにやって来たわけじゃない。どうか，みんな嫌がらないでほしい」

といった。それに答えて，

「大妃さまはお気持ちが晴れず，いつも哭泣なさっていたのを，卞尚宮がお側にいて，お慰め申していた。それが童女たちをつれて，今は外に出て行って，うらみ，悲しみがとめどもないありさま。どの尚宮がやって来られたといって，わたしたちが嫌がる筋合いがありましょう。喜んでおりますので，門が一刻も早く開くよう，応援してください」

といった。チョンポクは，それに対して，

「光海君のお妃がわたしをここに送って，お仕えするよう命令されただけのこと，門を開けるのどうのというのは，わたしには関わりのないことです。国の人間に食事をつくらせて食べ，着物を作ってくれる人がないので，侍女に作ってもらって着て，服地がなければ，大妃さまに申し上げて，いただくまでのこと。それで，少しでもわたしの話を聞かないようなら，お見舞いうかがいに往来する宦官にいいつけて，啓上することにしよう。不祥事があれば，内需司の者が捕え出

して，罪を糾すことになろう。月の障りがあって，気分のすぐれない者があれば，すぐに出してしまうように。わかりましたか」

といったので，女房たちはみな色を失った。

一人の女房が，

「それはなかなかすばらしい。病になって，外に出るというのは，休暇として，大妃さまのお取り決めになること。あなたの心のままになさろうというのか」

といったので，チョンポクはただ黙々としていた。

四十四

いく日かが過ぎても，大妃さまはチョンポクを少しもお召しにならない。チョンポクはいらだって，

「お側に置いて，いっこうにお召しがないのは，わたしが光海君に何か奏上しないかと心配って，冷遇なさるのだろう。こうやって，つらくお当たりになるのは，光海君を煙たがっていらっしゃるようで，そのことを是非，奏上することにしよう」

といって，すぐにでも席を立とうとするので，近侍の人が大妃さまに申し上げる。

「チョンポクがこちらにやって来たのは，まことに不幸なことで，初日に入って来たときから，油断なりませんでした。最初に聞いたことといえば，寝室にはだれが出入りするのかということで，われわれが出入りしているといったところ，にらみつけて，『王さまは前からおっしゃっている。鄭氏は当初いいわけばかりして，泣いてばかりいるので，外に出したが，殺してしまってもかまわない，とのことだ』と脅す始末。行動挙止も不埒きわまりなく，こちらにやって来て以来，何日か経ったにもかかわらず，大妃さまは一度としてお召しにならなかった。それで，今日，あえて拝謁を請うているのです」

大妃さまが，

「その者の姿かたちが醜くて，行動も言辞も不快きわまりがないので，見るのも嫌なのだが，一度こちらに呼んで，その者の話でも聞いてみよう」

とおっしゃって，お召しになった。ふだん少しも尊い方のお側に近づいたことなどなかった人で，醜い顔を上にあげ，正しく座って仰ぎ見ることができず，恐れおおくは思うのか，できるかぎりすまして，顔をぴょんと上げて，おずおずと座ってい

る。大妃さまが，

「お前は何しにここにやって来たのか」

とお尋ねになると，

「王さまみずからが大妃さまにお仕えするようにとおっしゃったので，参ったのです。その御命令のおもむきもたずさえております」

と答える。

「その御命令のおもむきというのは，いったいなんなのです。だれがこのわたしに対して，むやみに御命令のおもむきなどという言葉を使うことができるのか」

「わたしにこちらに参り，玉体を見守って，妖邪なることを禁じ，文書で報告するようにということです」

「それはそれは勿体のない話だ。わたしがどんなに威勢をくじかれ，力がなくなったからといって，一人の召使いまで，人にいわれて抱えることになろうとは。姑を嫁がたしなめるような国がどこにあるのか。妖邪なることとはな。わたしは何をしようにも，することができない。お前自身が入って，調べればいいことだ。父母や弟，そして幼な子まで奪って，この上，何が不足で，ここに閉じ込めて置き，自由にさせないのか。お前が後日，この罪責をこうむるときには，いったいだれといっしょにこうむるつもりなのだ。あの王など，信用することはできまい。わたしにつらく当っても，先王のお子ということだけで，名前をけがさないよう，わたしはつつしんでいるのです。王妃も政事にくちばしを容れず，よくよくたしなんで，自分の分でないことを悟って，聞きわけよくふるまうべきなのだが。しばらくしたら，わたしは大手を振ってここから出て行き，光海君など追放してしまおうぞ」

大妃さまがそうおっしゃると，チョンポクは低頭して，

「門を開けていただくよう，王さまに申し上げましたが，お聞きとどけになりませんでした。大妃さまみずからが王さま，王妃さま，そして世子さまにお手紙を書いて，わたしにくだされば，宦官を介してお渡しします。きっとお願いを喜んでお聞きとどけになりましょう」

と申し上げた。大妃さまは，

「前日にも，何度も懇曲に手紙をしたためて送ったのに，一度も返事がなかったのだ。よしんば悲しみはしても，こちらがへりくだる筋合いではない。出て行きなさい」

とおっしゃった。チョンポクは御前から引き退がって，座って，

「いくら威張って，親だといったところで，へりくだって謝らなくては，王さま，お妃さまが親として敬うことがあろうか。そうじゃないか。他に何か手立てがあるというのか」

といった。ある女房がそれに答えて，

「先代の王さまがお迎えになって，中宮とおなりになり，公主や大君までお産みになっている方なのに，それにこんな酷い仕打ちをして，親として扱わない。そんなことで，長く位を保てるものか」

というと，チョンポクは，

「王さまの御母上は恭聖王后なのですよ。大君を殺したのはだれの罪だとはっきりいえるものですか。王さまは先王を自分の父親とお考えだと思いますか。生きていらっしゃるとき，世子としてお愛しにならず，しっかり教え導かれることがなかったので，今，王におなりになったのに，何をどうしていいのかもわからない，御不愍なありさま。その晴らしても晴らし切れない怨恨を大君の身の上にお晴らしになろうとしたまでのこと」

といった。それに対して女房は，

「父親と母親がいないとしたら，人間はいったいどこから生れて来るというのか」

といったものだった。

ところで，罪人の応璧を籠に入れて，穆陵と裕陵に上げ，まじないを行ったのはどこだったかと尋ねたところ，応璧が，

「わたしがまじないを行ったのはどこかですって。わたしはひどい拷問に耐え切れなくて，ちょっとの間でも，苦しみから逃れようと，嘘をついたのだ」

といって，山を下りて，死んでしまうということがあった。応璧は大君の保姆尚宮の甥であったので，落とし入れられたのだ。

人びとが怒って，

「父親の墓をあばいたと大騒ぎして，そのあばいた人というのはどこにいるのだろう」

というと，チョンポクが，

「そのようなことは知ってはいても，だれだってこわがって，口を開くものか。ところで，寝室の方にも入ることを許していただければ，いろいろと便宜をはか

ってもいいのですがね」
という。
「どのように便宜をはかってくれるのか」
というと，
「今は介屎が権勢を張っていて，介屎の兄と介屎に，賄賂をしこたま与えれば，天下に自由にならないことなんてない。門を開けるなんて，たやすいことでしょうよ」
と答えた。

四十五

大妃さまにこのたくらみを申し上げると，大妃さまは，
「三人の方々に手紙を書いて，門を開けてもらうように頼むのはまだしも，国母として，そのような言うかいもない賤しい者たちに願いごとをするのは，まず最初にもっての外のことです。違心を抱いて，わたくしを殺してしまおうと監禁しているわけで，頼むどころではない，それが二つ目の不可の理由です。自分の母親には封爵し，わたくしは許さずに閉じ込めて置く，礼儀もわきまえず，頼んでも，返事はなしのつぶて，それが三つ目の理由です。年老いた愚鈍な女房の言葉は聞いて，重大な国母の請いを聞き入れない，それが四つ目の理由です。わたくしをこうして閉じ込めて置くのはすでに尋常でなく，必ず後日に自己の身の上に大きな禍が及ぶにちがいない。請うたところで，かなえるどころではあるまい。それが五つ目の理由です。たしかに今の身の上は窮屈で，悲しいことといったら限りないが，チョンポクなどという輩を頼って，こっそりと請うくらいなら，死を選ぶ方がましです。あなた方も，体面というものを考えて，よく応対するのですね」
とおっしゃった。
こうしている間に，十一月になって，チョンポクは着るものがなく，仮病して，仕事をしない。緑青の布や白紬，それに綿と履き物をお与えになることにして，女房に，
「あの者を普通の女房とは見なしていないので，あの者の賄賂の誘いには返答もしなかった。癸丑の年（1613）にこちらに仕える者たちを引き渡すように王がい

って来て，二人の大切な監察尚宮を連行していったことだった。あの尚宮たちは獄中にあって，過ごすことがたいへんで，さぞ寒がっているだろう。これもあい身互い身ということか。チョンポクにも食べる物をやり，着る物をときおり与えなさい」

とおっしゃった。暖を取る薪や食べ物もくださったので，持って行ってやると，チョンポクは横柄にもそっくり返って，

「くださった御恩は貴いけれど，わたしはちっともありがたくは思わない。ここにいる下女たちさえ，大妃さまのくださったものは嫌がります」

と答える始末。物を持って行った人たちも聞くにたえず，すぐに出て行く。

大妃さまはみずから手紙を書かれて，王と王妃と世子宮に門を開けるようにお頼みになったが，翌日，宦官がやって来て，大妃さまの文中にチョンポクが悪いとする言葉があったといったので，チョンポクはそれを聞いて，恨みに思って，怒り，

「嫌がるわたしをなだめて，こちらに来させ，本来は寝室に住む身分なのに，そうもさせず，わたしにふさわしい仕事をさせることもしないくせに，自分の仕事をおろそかにしていると，告げ口なさる。このわたしが罪人あつかいされることにならないか。まったく恐ろしいこと。くわばら，くわばら」

と，ぶつぶついいながら，便所にしゃがみこんでいる。

チョンポクの行動挙止が少しでも利発なら，どうして，ういものと考えないことがあろう。言葉があまりに不愉快で，憎たらしく，少しも可愛げがない。告げ口を恐れて，いっとき，憎まれ口をたたかず，善良ぶったりもするのだが，ある日，公主にお目にかかって，

「お母さんに似ていらっしゃるが，旦那さまをお迎えになることもあるまい。服を着た御様子はそっくりだが，そこいらの醜女なみの人生ですね」

といったりする。

四十六

公主が天然痘にかかって，チョンポクは喜び，今こそ意気揚々とし始める。物忌みで何もすることがないとして，寝室の門を閉じようと考えていたところ，チョンポクは仮病で横になっていたはずなのに，こそこそと起き出して，きょろきょろとあたりを見回して，疫神でみなが物忌みをしているのに，つつしまなくてはならな

い肉を刻んで調理し，酒を飲んだりし始めた。人がやって来て，それを見たので，チョンポクは，

「おおっぴらに酒や肉をいただくわけにはいかないが，わたしたちだけで，こっそりとやろうじゃないか」

といって，食べたり，飲んだりした。寝室の方ではその様子はわかるまいと高をくくっていたが，大妃さまはおさとりになって，

「チョンポクという者はこそこそやって来て，肉をかじり，酒をすすって，盗っ人のようで，不快で，いやらしい。早く取り上げて，そんなぶしつけな真似はしないようにさせなさい」

とおっしゃって，人をおやりになったところ，はたして他の一人とともに，座りこんで，食べたり，飲んだりしていた。

「天然痘におなりになったのが本当なら，お可哀想だが，でも，本当かどうかわからないので，こうやって，いただいていたというわけです」

と，チョンポクは口答えした。

この隙をついて，チョンポクは，十二月十七日，寝室の端にこっそりと放火した。火をつけたとき，二更（十時ごろ）であったが，あいにくそのとき，老いた文尚宮だけが，性格が直純であるとして，国母のために寝室が暖かくしてある，そのお側で寝ていた。火の音が急にし始めて，城門を閉める定刻の銅鑼の音がすでにして，二更も過ぎ，何の音もしないはずなのに，いったい何の音かといぶかった。チョンポクは自分の部屋で寝ているはずだが，きっと，あの者がまがまがしいことをたくらんだに違いない。急いで寝室の一枚戸を開けて出て見ると，明るい火の光が空いっぱいに満ち，火のはぜる音がだんだん近づいて来るので，脇の門を開けて出て見た。寝室に続く翼廊は軒がまっすぐにつながっていて，寝室では，天然痘の公主のために門をぴったりと閉じて，人びとがお側に侍ってはいたが，しばらくまどろんでしまって，火の音に気がつかなかった。だれか驚いて，閉っていた戸を開け放して飛び出す音を聞いた。さらにだれかあわてふためいて，駈け足で走り出しながら，声を張り上げ，「火事だ，火事だ」とわめき立てた。女房たちもそれに続いて，みな出て来たが，チョンポクだけがひとり出て来ない。

女房たちは衣服を脱いで，水にひたし，それを振り回して，火を消した。炭俵に火をつけたらしく，俵をつかんで放り出したが，軒先は早くも焼け落ちてしまった。

下婢もみな服を脱いで，消火に力を合わせたが，火がやんだ後になって，チョンポクが下僕を一人連れて出て来て，

「炭俵から火が出たのは少しも異常なことではありません。もともと，炭俵というものは長く積んで置けば，自然に火を出すものなのです」

などといいはった。それに対して，みなが，

「炭俵が火を出すというのなら，どうして木工寮の材木置場に炭を積んで置いたりするのですか。どんな所に積んで放って置いても，火が出ることはないのに，この出火は異常というしかない」

となじると，

「それなら，いったいだれが火をつけたというんです」

といって，平然としていた。

公主が疫疾にかかっていらっしゃるのをもっけの幸いに，焼け死にさせようという魂胆であった。

お側に仕える人びとや大妃さまは驚いて，どうしていいかわからず，寝室の一枚戸を閉め切っていたものの，母屋にまで火が回って来たので，やっと外に出ようとなさった。女房たちといったところで，ほんの子どもと老人の五,六人がいるだけで，とても消えそうにない火を消そうとしたのだが，この者たちをどうして一人前の大人といえようか。

チョンポクはさらに何とかして公主の疫疾をいっそう重く患わせようとたくらんで，禁忌を破り，下僕にこっそりと包丁を使ってあらゆる料理を用意させ，食べたのだった。

四十七

下人たちの中には何人か年端のいかない者たちがいて，こんな疫疾のときには忌まなくてはならない料理を作るなど，あやまったことをしたので，年老いた女房が騒ぎ立て，打擲したため，その下人は怒って，五,六人と連れ立って，介屎のもとへ逃亡して行った。すぐに介屎が出て来て，

「今，大妃はどう過ごして，公主はどんな具合か。また，女房たちはどのように毎日を送っているか」

と尋ねると，その下人が答えた。

「大妃さまは昼夜に泣きかなしむだけで，公主さまはいったい何がおできになりましょう。女房たちがどう日々を送っているか，ですって。何もしちゃいませんよ」

侍女のチョンスンが叱りつけていう。

「大妃さまなどという必要はない。ただ大妃といえばよい。公主さま，というのは，またどういうことだ。公主とだけいえばいいのだ。公主など，年を取って，このまま独り身で朽ちて行くのだろうよ。だれかを婿に迎えることなんて，金輪際，あるもんか。たとえ，病気で死んでも，そのままに放って置いて，けっして出て来られるようにはなるものか。国の大切な人として，だれがいったい重んじよう。大妃の性質が悪いというのははばかられるが，われわれの王さまを殺して，わが子の大君を擁立しようとして，あのように露顕してしまい，閉じ込められてしまったのだ。毛の先ほども，大妃・公主に気を使おうなどとはせぬことだ。あちらへの気づかいをやめないようなら，お前たちも殺してしまうぞ。お前たちがあちらに見切りをつけて，こちらに来るのを，今か今かと首を長くして待っていたのに，なかなかやって来ないで，それをどうして今ごろになって来たんだ」

それに答えて，

「あちらにいては，両親の様子もわからず，こちらで安否でも聞けるかと思って，参ったのです」

というと，介屎が，

「お前たちが，あちらでやっていることを，包み隠さず，すっかり話してくれれば，親の安否ぐらい，聞かせてやろうじゃないか」

とそそのかす。

「本当に何にもなさらず，ただ嘆き悲しんでいらっしゃるだけです」

と答えると，チョンスンは怒って，

「お前たちが少しでも嘘をつくようなら，みんなつかまえて，牢にぶち込むぞ。あるがままに話すんだ」

という。

「ほんとに知らないのです。殺すといわれたって，知らないことを，どうして話すことができましょう」

と答えると，チョンスンがさらに叱りつけ，

「話さないというのは，いよいよあやしい。親に早く会いたいのなら，大妃を早く亡き者にするか，さもなければ，火を放つのだな。即刻，放火でもすれば，お前たちは両班にでも取り立てられ，自由の身になるのはたやすいことだ。せっかくお前たちが来たのだから，肉と酒でも御馳走しよう」

といって，肉と酒とを持って来させたが，下人たちは手をつけようとはしない。

「どうして，食べないんだ」

と聞くと，

「悲しくて，いただけない」

という。

「悲しくて，こんなものが食べられないというのか。早く食べるんだ」

「大妃にしかられると，つらいので，食べません」

また，

「どうして泣くんだ」

と聞くと，

「あの中に入って閉じ込められたままで，苦しんでいる童たちのことを考えて，泣くのです」

という。

「いいから，早く食べるんだ」

というと，

「忌諱で，肉を食べることができないので，食べません」

と答えた。

「いったい，なんのための忌諱だ」

「公主が疫疾にかかっていらっしゃる。その忌諱です」

介屎はおどろき，喜んで，尋ねた。

「いったい，どんな疫疾か」

「やっかいな天然痘にかかっていらっしゃる」

「安静になさっているのか」

「大人しく安静になさっています」

「どのくらい瘡(かさ)が出来ているんだ」

「少し瘡が出来ていらっしゃるようです」

「もう何日くらい患っているのか」

「今はほとんどよくおなりになっていらっしゃいます」

「ところで，チョンポクを大妃の寝室で仕えるようにと送ったのだが，いったいだれが邪魔立てをして，お側で使わないのか」

「わたしらのような子どもに，どうして大妃さまのことがわかりましょうか」

「まさか，聞いてもいないというのか」

チョンスンが横からまた叱りつけ，

「大妃さまなどというなと，いっている。どうして大妃さまなどというんだ」

という。介屎がチョンスンをにらみつけ，

「お前は横から余計な口出しはするな」

というと，チョンスンは介屎に対して，

「どんなことで，尊く思う気持ちがあるかして，これを怒らないのか。あちらが王さまを殺そうとしたのをありがたいとでも思って，あなたは怒らないのか」

といった。

四十八

中還の一派に所属する子どもの下人たちだったから，いっしょにやって来れば，自由にしてもらえるかと思って，やって来たのだった。ところが，あまりに叱りつけられ，御主人をはずかしめられるので，ついて行った子どもたちは腹を立て，無惨な思いを抱いて，帰って来た。

「こんなことになるとわかっていれば，行かなかったのに。ひょっとしたら，自由になれるかと思ったのに，公然とはずかしめを受けてしまった」

と，ぶつぶつひとりごとをいう子どももいたが，自分たちだけでまた出て行こうという子どももいた。

寝室尚宮たちは，忌諱のために閉じ籠っていて，外で何が起こっているかもわからない。サオクという子どもがひとり寝室の軒下で宿直をして眠っていたが，ある日，いつもと違って，おそくまで寝ていたので，いぶかしく思って，お側仕えの女房が塀を越えて来て見ると，両手をしばり上げられていた。火がつき，台所の軒に火が移ろうとして，眠っていた人びとがやっとのことで起き，水を汲んで，ようやく火を消し止めた。いったいだれがしたことかわからず，こわがって，火が出たという話も口外せず，知っている人だけが知って，じっと耐えて過ごしていた。

この子どもたちが引き続きやって来て，恐ろしい心を抱いて，夜警をして回り，人びとをこわがらせた。火を放って，騒ぎまわり，外では大晦日のお祭りに使う豚をたくさん仕入れて来させ，宦官が光海君に，

「どのようにして，中に入れましょうか」

と申し上げると，

「ぶつ切りにして，入れるがいい」

というので，差備門のあたりで豚や鹿や獐（ノロ）を屠っている音が，寝室まで聞えて来る。肉を棒に串刺しにして中に入れようとするので，

「しばらくお待ちを。こちらが入れろといったら，入れなさい」

というと，宦官は大声でどなり，

「われわれがどうしてわれわれの思いどおりに振る舞えるというのか。以前は獣をまるごと入れさせたのに，今年はどうしたことか，切り身にして入れろという王さまの命令で，仕方なくぶつ切りにして持って来たのだ。つべこべいわずに，早く受け取れ」

といった。

こちらが受け取ろうとしないと，兵士たちが放り込んで，さっさと門を閉めさせた。

天然痘を病んでいる間は，刃物仕事や斧仕事をもっとも忌むことを知っていて，わざと獣を切り身にして，中へ入れさせたのだった。

しかし，神霊の加護があり，むごいことだとあわれんだのか，公主の天然痘は大事に至らず，きれいに治癒なさった。

外に出て行った女房たちは，公主の場合は，天然痘が外に逃げ出さないように閉じ込めて置いて，きれいに治ったのに，どうして自分たちの孫たちがどれほど予防をしても助からずに死んでしまったのか，至極，異常なことだと考えた。

あちらの女房たちが毎日高い所に登って，そこへ来た子どもたちに向かって手を挙げて合図をし，子どもたちが塀を越えて逃げて行ったりすることがあった。

ある日，夜更けにだれかが塀を越えて逃げようとするのを，ある侍女の召使いが追って出て見て，自分の同僚たちに言い付けにもどろうとする間に，その者は塀を飛び降りて引っ返し，自分の部屋にもどり，眠ったふりをしていたので，いったいだれが塀を飛び越えようとしていたのか，うやむやに終ってしまったことがあった。

つかまえたところで，処分することもむずかしく，わざと知らないふりをして，とがめずに置いた。

その者たちはどうにかして出て行く思案ばかりして，言葉にできないような巧らみを考えたりもする。あちらの女房が夜になるとやって来て，高麗柳の木の上に座っていたが，人が出くわすと，あわてふためいて，履き物を脱ぎ捨てて，逃げて行ったりした。

他の女房たちは，もしや自分を捕まえに来るのではないかとびくついて，たとえば夜になって，こちらの御殿の女房に会っても，あちらの殿の女房ではないのかと，魂飛魄散というありさま，われを失って，大声を張り上げたりする。わたしをだれだと思って，そんなに声を張り上げるのか，わたしなのに，どうしたのです，といわれたところで，どうして声を張り上げたのか，どこへ逃げ出したものか，自分でもわからなかった。

四十九

乙卯の年（1615）の春になった。卞尚宮が出て行ってからは，死んだのか生きているのか知ることもできず，何も申し上げずに放って置いたが，どのように考えたことか，前もって話もなく，四月の晦日に，卞尚宮をもどしてくれた。尚宮がもどって来る前，介屎が会って，手を拍って，

「われわれを殺そうとしたのを，天が知って，幸いに捕え出すことができたのだ。王さまをどなたと心えて，あえて殺そうとするのか。天が殃禍をお前にくださったので，今さらだれのせいでもない。今なお，安らかに生をまっとうできないよう，天に祭祀をして，われわれを殺そうとしているのだろうが，まったく事は露顕しているのだ。しらを切るのもいいかげんにしろ」

といって，ますます声を張り上げ，手を拍って，わめきたてる。こちら側に口があっても，どんな言葉をいえようか。尚宮は仕方なく黙ったまま座っていたが，手の上げ下げもゆったりと，意識はいまだ朦朧としている。

「そのように黙々としているのは，わたしの話が事実であるからに相違ない。なるほど，口はあっても，いったい何の話ができようか。あまりに図星なので，言葉もあるまい」

と，介屎はたたみかける。

光海君妃がみずから会っていう言葉があるというので，尚宮がしばらくの間待っていたところ，また何の目論見があってのことか，待ちぼうけにさせて，人を介して，

「お前を最初に殺してしまえばよかったのに，殺さなかったのは，すべてわたくしの恩徳であることをわきまえているのか。あそこから出て行くのにも浅知恵をはたらかせ，病気を口実にし，暇乞いをして出て行ったのだったよな。それを，お前がいなければ，そばには侍る人がだれもいなくなって，お前をまた入れるのだ。今からは妖邪なことなど考えずに，ちゃんとお務めするがいい」

と伝えた。

介屎が口をはさんで，

「わたしの言葉を聞いて，大妃はひどくお悲しみのようだが，さっさと死んだら，さぞすがすがしかろうに。大君を王の座につかせ，安穏に過ごそうと思ったのだろうが，発覚してしまった。是非ともここで，わたしの話を聞いて，さっさと死んでしまえばいい。公主のことは，こちらの王妃さまがみずから育てて，結婚もさせてくださるだろう。公主はすくすくと育って，門を開けることもないから，盗賊の群れにつかまるようなこともない。恭聖王后も天朝に奏請なさろうとしたが，聞き入れられなかった。今，門を開けるよう頼んだところで，どうして許可されることがあろうか。一日も早く死んでしまえば，両方の御殿にとって，それがなによりなことなんだが」

という。あまりにくやしくて，尚宮は死ぬにも死なれず，

「人の生死は天命にかかっている。どうして心のままに死ねばなどというのか。早くから死にたいと夜昼となく祈願なさっていたが，どういうわけかお生きながらえになって，今になって，そのような話を聞くのは，まことにつらい」

といい，また，

「公主お嬢さまはたしかにすこやかにお育ちになるでしょうが，実の父母にまさる方がこの世間のどこにありますか」

というと，介屎が笑って，

「さっきの話は冗談だが，生き続けていらっしゃって，こちらが勢いを失して，成り下がっていくありさまを見届けようとしているのは本当か」

と詰問する。それに対して，

「人の心というのは似たようなものだが，わたしはそんなことは聞いたこともな

い」

と答えると，介屎は，

「光海君が亡くなっても，世子がいらっしゃる。閉ざした門が腐ったところで，それを開けることは，そんなにたやすい仕事だろうか。今も光海君は世子に，わたしが死んだ後も，わたしが生きていたときと同様にするように，とおっしゃっている。もしや，いい目に遇えるかと期待して生きない方がいい。尚宮よ，わたしの言葉を聞いた方が，利することが多いから，よく聞くのですね。あなたがこの話をすぐに口外するようなら，滅族に当る禍を招くことになるので，あなたとわたしの間で，固く約束して，口外しないようにして欲しい」

といった。尚宮はあまりに恐ろしくなって，

「わたしは心の中にそのように恐ろしい話を持ち続けていることができないので，こんな話は聞かない方がいい」

というと，介屎が前ににじり寄って，手首をつかんで，

「われわれは幼いときからいっしょに住んで，たまたま隔たりが生じ，疎遠になっただけではないか。あなたは大妃さまに仕えるようになって間もないのに，どのような情がそのように重いのか」

といいながら，泣いて，いろいろとなだめて，また逆に威厳を示しながら，

「光海君と妃とが尚宮に会って，直接におっしゃろうとしたが，わけがあってお会いにならず，わたしに言わせようとなさったので，いうのです。ただ今，中に入って行くのは死ぬことで，もし生きながらえたところで，召使いだけがつらい目に遭って，得なことは一つもありません。こんなことを口外すれば，死んだ親に至るまで禍を及ぼすことになるので，くれぐれも用心するように」

といった。尚宮はいくら我慢しようとしても，くやしさをおさえることができず，泣きながら，

「これはわたしにはできかねることで，わたしを中へ入らせないようにしてください」

と答えると，介屎は，

「尚宮は都合のいいことばかりいい，わたしの話を聞かないので，わたしの手に負えない。勝手にするといい」

といった。

五十

甲寅の年（1614）の四月に宦官のパクチュンシンをこちらに送って，公主と大君がいらっしゃったところをすみずみまで調べ回して，その翌日またやって来て，

「しなくてはならないことがあるので，それで道具類を全部外へ出してしまいなさい。動作がのろいようだと，女房たちみなを殺してしまうぞ」

といって，せかせかと忙がしげに振る舞う。女房たちはどうしていいかわからず，せめて理由だけでも知っていれば，道具が持ち出されるのも納得できるのだが，少しの猶予も与えずに，道具を持ち出そうとする。公主の居間から家具調度を運び出し，また宦官をやって，大君の道具類をすべて外に運び出した。すべての道具と，かまど，きぬたの石台まで取り出し，トンカ・ソカ・プクカ・ナムチョン・ヤンチン・タンチといった者たちがかついで出るのを，国庫の番をする宦官が奪うようにして受け取り，車に積んで行った。そうして南殿の庫というもの，宦官が門にしろ，一枚戸にしろ，枢に釘をさし込み，門の間をみな張りつけて，のぞけないようにし，品数をみな数え上げ，記録して去って行った。

内外の塀をいよいよ高く築いて，いばらをその上に乗せた。門には閂をかけて，釘をうち込み，土居の外にさらに塀を築いたので，年老いた女房が泣きながら訴えた。

「内と外とでもっぱら塀を五,六尺もさらに高くし，門ごとに閂をかけ，枢に釘をうち込んで動かなくして，大妃さまはただお亡くなりになるのをお待ちになるばかり。父母と子孫のあいだに，後日まで残る名前が気の毒で，あわれといえばあわれなこと。母親を幽閉したという悪名は免れようがないでしょう」

というと，宦官が尻ごみしながら，

「大妃が正しく処身なさったら，こんなことになったろうか。無駄口をたたかずに，つらくとも，よくお仕えしていればいいのです。われわれにあれこれいったところで，まったく無意味ですよ。国の禄を食む人間がいったいだれが正しいなどとうんぬんできようか」

といった。

宮中を狭苦しくして，ようやく歩くことができるくらいにして，差備門に閂をさし込んで，特別な任務を帯びた者が一日に二度ずつ出入りした。朝にも三つの御殿

からお見舞いの者が来て，ようやっとのことで挨拶するが，拝礼もなく，「御機嫌いかがでしょうか」という言葉もなく，立ったまま，出て行った。

こちらが何かをいおうとすると，

「われわれはそちらの言葉をうけたまわりに来たのではなく，生きているかどうかがわかるだけでいいのです」

といった。

ある日，お見舞いの宦官ナオプが来たので，

「手紙を持って行って欲しい」

というと，

「手がなくて持って行かないというのではない。足がなくて持ち歩けないというのではない。重くて嫌だというのでもなく，口がなくて言葉が伝えられないというのでもありません。ただ禁止されているので，持って行けないのです」

といって，取り合わなかった。

宮中にたまったごみを捨てるにも空いた場所がなく，それを宦官に告げると，

「申し上げはしても，光海君は引き取って処理などするなとおっしゃって，一カ所にみな集めて放って置けと，お命じになる。わたしどもが勝手にかたづけるわけにもいかないのだ」

というので，仕方なく，一年のあいだ放って置いたごみが山を積んだようになった。

耐えがたくて，百回も頼みこんだところ，宦官はしかりつけて，

「光海君におうかがいを立てても，かたづけるなとおっしゃるので，かたづけることはできない」

というのみであった。

このようにして二年あまりが経って，悪臭が部屋の中まで立ちこめ，蛆虫が生じて部屋の中や釜の上に満ち，水で洗ったところで，消え去りはしなかった。お見舞いの宦官に応待する尚宮が何度も泣いて，懇願したので，ようやく老宦官とその従事官とがやって来た。閂を抜き取って門を開け，別将，内禁衛，兵曹郎庁，司掃衛将などが下人をやって，ようやく掃除をさせた。

屋根の上には烏や鵲の糞がいっぱいに積もって，まるで漆喰を塗りこめたよう。別将があきれて，

「女房たちは少くなって，逆に鳥獣たちが多く，汚らしい物を食べて糞をして，

屋根の上は漆喰を塗ったようだ。悪臭が宮中に満ちて，少しの間その臭いをかいだだけでも耐えがたいのに，大妃さまはどのようにして耐えておいでか。先の王さまのとき，この宮中に来て見たことがあったが，先王が崩じられて間もないのに，子孫がこのようにしてしまって，とてもまともに目を開けて見られない」

といって，目をおおい，涙を落としながら，出て行った。

掃除のあいだ，女房たちがもしや逃げ出さないかと恐れて，護衛の軍士を取り囲むようにさせ，その上別監を見張らせて，はやくかたづけろ，遅ければ殺してしまうぞと，おどしつけた。

このようにすることが二年あまりに一度，糞尿については三年に一度しかかたづけてくれなかった。

五十一

ある夜，女房が二人並んで灯りをつけて宮中を歩いたところ，翌日，宦官が下人を連れてやって来て，どこの馬の骨ともわからない男を宮中の行廊の局の上に上がらせ，すみずみまで調べさせた。女房たちはこわがって，奥の方へ忍びこんで隠れたが，宦官は，

「いったい何をしようと，夜中に灯りをつけて歩き回ったのだ」

と詮索した。

下人が履く物がなく，素足で往き来して，足を傷つけでもして，ちょっと泣きでもしようなら，すぐに宦官がやって来て，

「どうして泣くのか」

と尋ねる。

「足が痛くて泣くのです」

というと，

「足が痛いわけがない。泣くな。泣いたら，殺すぞ」

とどやした。

女房たちが住っているところや寝殿が古くなっていて，あちこち雨漏りがして，雨が降ると，身の置き場もない。あまりに惨めで，雨の漏る所を葺いて，なおして欲しいと頼んでも，聞くふりもしなかった。

仕方なく，女房がこっそりと屋根の上に上って行くのを宦官がようやく見とがめ

るということがあった。

ある下人たちが，チョンスンの言葉とチョンポクの命令で，甲寅の年（1614）から戊午の年（1618）まで，放火しないこととてなく，炭俵にも，薪にも火をつけ，蓆にも火を放った。いたし方なく，申の刻からは火気を禁じることにし，未の刻には夕飯をつくって食べてしまい，申の刻になると鐘を鳴らしながら，台所のすみまで，全宮中のいたるところまで見回ることを，二時間に一度ずつ行った。光海君の側の甘言に乗せられた五,六人の下人のあいだに仲違いがあって，争いの果てに陰謀を密告したので，大妃さまは痛忿して，それぞれを御前に召して座らせ，事の次第をお尋ねになった。その者たちは，鞭でふくらはぎが切れもしないうちに，いちいち白状した。

「だれがいったい放火をそそのかしたのか」

というと，

「光海君の侍女のチョンスンが命じたのです」

と答え，また，

「お前たちが放火して，大妃と公主を焼き殺せば，お前たちを下僕の身分から引き上げ，褒美を与え，われわれのところへ来て安穏に住まわせてやろう，といいました」

といった。

何度も放火して，屋根の上に火の手が上がって盛火急であるのを，老少となく女房たちが群れて逃げ出て，火を消すようなことが重なった。

差備門にいた宦官があまりのことに気の毒になり，光海君に告げたものの，

「消さずに，放って置け」

というのみであった。

女房たちがそのときごとに力を合わせて火を消し止めたので，見張りの宦官や別将たちは大いに奇特なことと思った。

五十二

女房たちが履く物がなく，古い着物をほどいて紐をより，履き物らしい物を作ったりもした。古くなった履き物をほどいて，もう一度縫いなおして履き，それもすり減って，使えなくなったので，矢鏃を抜き取り，錐を作って，きちっとした草鞋

作りを始めた。

冬になって，雪の上を歩く物がなく，男物の大きな長靴をばらして，その鹿皮で靴作りを始めた。

春の間に塩漬けをしてなめして置き，冬になると，鹿皮底の靴で，ようやく厳しい冬を過ごすことができた。

十年も経つと，あらゆる物が底をついてなくなり，靴底を結び付ける紐がなく，麻服をほぐして紐をよって結び付け，裁縫の糸がなくて，モシの服と木綿の服をほぐして，使った。

女房たちは足がただれて，泣きながら往き来している。一人の女房が足を挫き，大声を上げて泣くので，大妃さまはそれを聞いて，可哀想に思い，

「ちゃんと手当てして，足を大切にしてください」

とおっしゃった。そうして，最初は，刃物を使って底の平な木履を作ったりしたが，後には腕が上達して，底に屈曲のある木履が作れるようになった。

木履の釘にはお櫃に使ってあった釘を抜いて使った。

刃物がないので，昔からあった宝物の環刀を二つにして，刃物を作り，また鋏をこわして，砥石で磨いて刃物を作った。下人の服を作る布がなく，古い鴉青服をほどいて，ぼろぼろの服の上をおおい，身分の上の者はチマを作る布がなくて，恥かしい思いをしていたところ，獣の糞に藍の種が混じっていて，一年育て，二年が経って，たくさんの種が実ったので，藍色染めを始めることができた。

米をとぐためのふくべがなく，笊で米をといでいたが，鳥がふくべの種を運んで来て，一年経って，二年目には小さなふくべがなり，三年目には中くらいのふくべがなり，四年目には大きなふくべがなった。綿がなくて，冬を七,八年過ごした。まったくもって，新しい綿がなくて，寒さにぶるぶると震えていた。たまたま綿花の種が入って来て，それを植えて種を取り，二,三年目にはたくさんの綿花が開き，それで衣服に綿入れをして着ることができた。

四つの季節がめぐっても，新しい野菜を手に入れて食べるということがなく，茄子と胡瓜と冬瓜の種がやはり獣の糞に混じっていたのを植え，ようやくナムルの膳をこしらえて食べることができた。

生雉の首に唐黍の種がつまっていたので，それを植えたところ，大いに実った。秋になって，刈り取り，ふるいにかけて見ると，立派な唐黍であった。

萵苣(チシャ)の種が獣の糞の中に混じっていたのを植えることもした。

何年か経って，中の塀が崩れ，あまりに無惨なので，庭から土を運んで，固めて，修理した。

建物も古く，何年も放って置いたから，柱が折れて傾き，人が通ろうとして頭をぶつけるようになったので，一本の木を得て，その場しのぎをし，宦官に，

「光海君に報告して欲しい」

と百回も頼んだが，聞くふりもしなかった。

外側の塀もまた崩れたが，女房たちが積み上げて修理したので，宦官がやって来て，見て，

「婦女子のすることでなく，もっぱら男子の仕事のようだ」

といって，感心していた。

種子をまいていないはずの野菜も寝室の前庭にいろいろと生じ，ありがたく思って，よく育て，摘んで，ゆがいて，食べたところ，はなはだかんばしく，甘い味がして，みんな食べてしまった。夢に人が現れ，

「あなた方が野菜をいただくことがないようだから，これらの野菜をさし上げたのですよ」

といった。

五十三

棗の木が以前からあったが，虫が巣食ってしまって，実を食べることはできなくなり，閉門中には新しい果実がいっさいなくなっていた。ところが，大妃さまが父の府院君のために祭祀を執り行ったところ，戊午の年（1618）から，この木は勢いを盛り返し，実が栗の実のように大きくなって，味がとても良く，通常の棗と違って，一俵ほども実がなった。

夢に人が現れて，

「わたしがわざわざおいしい実がたくさんなるようにしたのだが，女房たちが盗んで食べたりすれば，ふたたび実がならないようにするぞ」

といったので，人がその棗の木の番をすることにした。

桃の木も自然に径の脇に育って実を結んだが，さながら天桃ともいうべく，味が非常であった。夢に現れて，また，

「普通，桃の木というのは実がなるのに三年かかるが，この木は二年だけで実が

なるようにした。いやしい輩が食べれば，また実らないようにして，ただちに枯らしてしまおう」

といった。

大妃さまだけが召し上がって，しょせん夢の話だからと，信じないで，みんなで食べたところ，その年の冬に，その木は自然に枯れてしまったようだった。

大妃さまは女房に命じて栗の木をお植えになった。何年かして茂るようになったが，己未の年（1619）に枯れて，不思議に思ったところ，また夢で，

「この木が枯れたことを不思議に思わないように。いずれよみがえる。この木がよみがえるのと同じように，大妃さまはふたたび力をお取りもどしだろう」

と告げた。翌年には一枝が生き返り，またその翌年には一枝が生き返って，ふたたび夢で，

「すべての枝が生き返ったら，きっといい目にお遇いになろう」

と告げたが，三年目には一木の枝がすべてよみがえって，昔の姿そのままにもどった。

秋晩く狂い咲きする様子がまるで春に満開になるのと同じで，人びとは不思議に思ったが，夢に現れ，

「これには意味があるので，心配しないように」

とさとした。

こちらがあまりにひっそりと生活を送っているので，心配になって，光海君は宦官を送って様子をうかがわせ，女房に，

「ひっそりとお住いで，いるのかいないのかわからない。まさかお留守ではないでしょうな」

といわせた。

戊午の年（1618）の夏に火事が起こって，貞陵の谷の方から火が進んで来たので，内側から門をたたいて，いくら呼んでも，番人は答えてくれない。あまりに叫んだから，仕方なく返答したので，

「火が移って来ても，門を閉めて置いて，われわれを焼き殺そうというのですか。すぐに門を開けて，われわれを火の手から逃がれさせてください」

というと，

「光海君妃が門を閉ざしたまま，けっして開けないようにとおっしゃったので，開けるわけにはいかない」

といって，聞かなかった。

女房があまりに心配に思って，火の進路を見ようと，屋根の上に上ったが，宦官が門の外で見とがめて，

「早く降りろ。王さまが知ったら，みな殺しにされるぞ」

といったが，降りようとしないので，さらに

「ゆっくりとそんなところに腰を落ち着けて，火の手を見て，どうするつもりなんだ。頭をたたき割ってしまうぞ」

とどなりつけた。

宦官が光海君に，

「火が移りついたら，大妃さまをどうなさるおつもりですか」

と尋ねたところ，光海君は，

「かまわぬ。放って置け」

と答えた。

いっこうに門を開ける気配がないので，お見舞いうかがいの宦官に，

「大妃さまの御容態が悪くて，吐血なさっている。後になって報告しなかったと責められるのは本意ではなく，今，報告して置きます」

というと，光海君の方では早速宦官を呼んで，

「どこが痛くて，またどんなわけで吐血したのか。一日に何回くらい吐血するのか。女房の言葉など信じられないので，医女を入れて脈を取らせてみよう」

などという。

「たとえそのように重い御容態でも，医女を入れるようなことはやめてください。門を開けていただくのが，百病すべてにいいかと思います」

というと，光海君は，

「わざと病を誇張して，外に出ようとしているのだろう。女房たちをみな殺しにしてしまうぞ」

と伝えた。そうして，

「病が重くて，痛いというのなら，すぐに報せてください」

「こうして苦楚に会っても，不満などおありじゃないでしょう」

と，とぼけたことをいって来て，粥を召し上がるように差配して，嬉々として日ごとにお見舞いをさし上げた。と思うと，丁巳の年（1617）からというもの，陰暦の正月にもお誕生日にもお見舞いはなく，粛拝もなかった。

年々の貢物などもこちらにあったはずなのだが，人が知るのを恐れて，貢上の目録に書かれた文字を，光海君付きの宦官が消し取った上で，こちらに入れさせるようなことをした。

五十四

辛酉の年（1621）の七月に砲手たちに依頼して，内蔵司の下で宿直させるようにした。一人の砲手が三更に夜警として回ったが，女房たちは万軍に取り囲まれたかのように物怖じした。

女房たちは，彼らが押し込んで来て，銃を撃って殺そうとしないか，身も心もすくみ上がるようで，寝室に行って，大妃さまをお守りしながら，

「いっしょに参ります」

といったりした。

砲手たちは王さまの住んでいた本宮に行って，毎年お目見えをして，いつも空砲を撃って鬼を追い，その次にわれわれの御殿に来るようにしていたのだった。

女房が病気になって外に出してもらうときには，百回も請願して，やっと出してもらったが，介屎・ウントク・カプにつてがある人であれば，外に住む親に手を回してもらえば，病気にかかってない人でも容易に外に出ることができた。女房たちが泣きながら，

「御殿は大きいのに，住む人は少い。夜になると，恐ろしくてたまらないので，病んだ人だけ出して，元気な人は出さないで欲しい」

というと，王さま付きの宦官が，

「大君だって出したのだし，女房たちなど，どうして大切に考える必要があるだろうか。無駄口たたかずと，さっさと出すのだ」

といって，このようなことが五,六回と重なった。癸亥の年（1623）の正月の初三日には死んだ女房の下働きの召使いをすべて外に連れ出そうとするので，大妃さまは，

「わたくしを殺そうという考えで，ここに閉じ込めたのでしょうが，悲しいことに，早く死ぬ道理なのに，わたくしの命は天にかかっていて，人の意のままにはならない。三十余人の女房たちをみな殺して，この宮中は空になり，烏と鵲とトッケビ（妖怪）だけが巣食っているありさま。今，死んだ女房たちの召使いまで

連れ出してしまえば，わたくしは一人恐ろしく，ここではとても過ごせない」と懇願なさったが，聞くふりもせず，早く出て行くように督促する始末だった。

二人の女房の召使いだけ，さし当って，連れ出して行ったが，その様子は犬を引っ張って行くようだった。

三月十日，宦官をよこして，

「病気の者がいれば，外に出せ」

といって来た。

三月十二日には，皮の上に二人の天然痘の鬼神の絵を描いて，赤い色の小さな巾着に死んだ女房たちの名前を書いて入れ，まだ生きている女房たちの名前を中に入る予備軍として書いて外に貼り，宦官に持たせて，

「この皮は寝室の門の中にかけ，巾着は，そちらにいる女房たちの目に触れるよう，いつも携帯していてください。なくせば，たいへんな目に遭いますぞ」

といって来た。

それを見て，あまりにおぞましく，恐ろしくなって，すぐに埋めてしまった。

癸亥の年（1623）三月十三日の三更に門は開いた。

久しく門は閉じていたが，宮中では奇特で，神々しい祥瑞を見ることが続き，年老いた女房たちは祝寿し，若い女房たちはかしこまって，何をしていいかわからぬほど，万古の盛事であった。

辛酉の年（1621）・壬戌の年（1622）からは神人が天降って来て，女房たちの目には不思議なことが数多くあった。

癸丑の年（1613）から経験した悲しいこと，いつも宦官がやって来て邪魔立てをし，叱りつけたこと，虐待，不道，不孝のことどもをすべて書き付けることはとてもできず，その万分の一だけでもと記録した。

すべてを書き付けようとすれば，南山の竹全部を切り尽くすのと同じこと，どうしてなしえよう。すべてを語ろうとすれば，一つの天地が尽き，後の天地が興るだけの物語を語ることになる。以上は女房たちが少しの間記録して置いたまでのこと。